

### ウォリアーの独白 3

どこまでも続く大海原は、ひどく静かだった。聞こえてくる音といえば、船底を水が洗う音と、時折船体がきしむ音程度だ。昼間であれば海鳥たちが鳴き交わす声が聞こえていることだろう。だが、まるで昼間のように水面を照らす月が出ているとはいえ、彼らがそれを太陽とみまごうはずもない。目を閉じれば、堅い陸地の上で心地よい風の中、ハンモックに身を任せていると錯覚しそうな夜だった。

ここアモロード近辺の海域は、ここ百年の間にひどく海流が乱れたという話だ。それに乗ずるかのよう、様々な魔物が姿をあらわし、別の大陸との交易すらも絶たれたということだ。だとすれば、空には暗雲たちこめ、波は船底どころかすきあらば甲板を洗おうとし、どこからともなく甲高い魔物の声が迫ってくるというのが、思い描く姿ではないだろうか。

日によっては、場所によっては、まさにそうである場合もある。だが、少なくとも、今おれたちが停泊している区域においては、そんな光景は見られなかった。

「そーうでもないんだな、これが」

静かだ、と。我知らず声に出ていたのだろうか。どこか面白がっているみたいな声が、おれの思いを否定した。そして、するするとマストから降りてきたパイレーツが、おれの隣に来ると船の進行方向をさす。彼ももともとの船でならば、交代で見張りをするなどといった職務からは解放されていたことだろう、と。そんなことを考えながら、おれは彼がさす方向を見、目を細めた。

「少し遠いか」

異常を捉えられないおれの様子を見て取り、彼は呟いた。

「どうした」

「じき、わかる。と言いたいんだけど、そーもいかにないか」

軽い調子で言いながら、それでも進行方向から目を離すことなく、パイレーツは懐から取り出した双眼鏡をおれに押し付けた。そして、水面だとなつてくわえ、覗くようにと促す。

言われた通りに、おれは双眼鏡を受け取ると覗きこんだ。水面との言葉に従い、進行方向の水面を見る。

まるで湖のようにないだ水面だった。満月（もちづき）の姿をも、歪みなくうつすほどに静かだ。

「いいや、よく見ろ」

何もないじゃないかというおれの言葉にかぶせるようにして、パイレーツが言った。しばしおれは、その近辺を眺め続けた。

「……っ！」

月が、二つある。おれが水面にうつった月だと思いこんでいたのは、正体不明の発光物だった。思わずおれは空を見上げた。欠けたることのない真円が中天に浮かび、下界にその裸身を惜しみなくさらしている。そして、それはもっと離れた場所につつましやかな分身を作り出していた。

「危険はないと思うんだけどね。念のため、皆起こそうかと」

「進路を変える（にげる）べきではないのか？」

「物見遊山じゃないデショ」

ああでも物見遊山ならむしろ近寄るべきかも、と。そう言って笑うと、彼は肩をすくめた。

船室へと入っていく姿を見送り、おれは再度水面にうつる光へと視線を戻した。ああ、なぜおれはあれを月だなど見誤ったのだろう。

ちらちらと波間に揺れる光は、満月の大きさどころではない。この船と競うような大きさがあつた。それだけではない。じっくりと観察していると、少しずつ大きさが大きくなっていることがわかる。そして、近づいてきている。何かの反射などではあり得なかつた。明らかに、海底からの光だつた。

しばらくすると、目をこすりながらギルドメンバー　ファランクス、プリンス、モンク、ゾディアック、そしてファーマーたちが甲板に集まってきた。もちろんパジャマ姿というわけではない。めいめいが、自分の武器鎧を身につけている。

「状況の変化　は、ないでしょ？」

パイレーツの問いというよりは確認に、おれは光がかなり大きくなっていることと、すぐ近くまで来ていることを告げた。おお、と、面白そうな声をあげてから、パイレーツは船縁に近づいた。そして、じっと光る水面をみつめる。

「魚だとありがたかつたんだけど、こりゃ違うかな」

そう呟いて、彼は目を細めた。光る魚などいるのかというファランクスの言葉に、伝説じゃなくてわりと普通になどと答えている。

「さて。こういう場合、冒険者のとる道はいくつかある」

水面から目をはなさず、パイレーツは片手をあげた。そして、人差し指を立てる。

「君子の道。怪しげなものには触れず近寄らずで全速後退」

たまに、逃げたら追いかけてきたりもするけどねと付け加えながら、中指を立てた。

「学者の道。何かへの導（しるべ）であることを期待し、光を狙って投網をなげしてみる」

次は薬指だつた。

「漁師の道。真ん中あたりに狙いを定め、銚を発射する。ああ、そういやこの前新しいのがついたのでねえ」

小指を立て、コレが最後とつけくわえる。

「探検家の道。とりあえず潜って様子確かめる。　さて皆々様方、他に何か道はござんすか？」

芝居がかった調子で問いかけると、彼はほんの一瞬だけ水面から目をはなし、皆を見回した。

「　ないな」

しばしの沈黙の後、おれはそう口にした。そして、念のため、皆に對しないだろうと問いかける。その視界の端を、何かが横切つた。

「まあ、お父さんは君子の道を選ぶとして」

それが何なのかを確かめようとしたところで、パイレーツが笑いを含んだ口調で言った。

「だれがお父さんだ」

ほかに意見はと皆に問いかける彼に對し、渋面をつくり言いかえしたところで、派手な水音が響いた！

「な　！」

大慌てでおれは暗い水面をのぞきこんだ。だが、良くわからない。ふりかえつた。現在船に乗っている人間の顔を確認、絶句する。一人足りない。星の動きから様々なことを知るプロフェッショナル、だが、見かけはどうみても両親の保護下にいるべき子供　ゾディアックがいなくなつていた。

「誰も気づかなかつたのか！」

「アンタも同じデショ！」

半ばやつあたりに近いおれの叫びに對し、人のせいにしないのと返すと、パイレーツは船首の銚へと向かう。向かいながら、暗い水面へと呼びかけている。そして、誰か救命ボートへと声をあげた。

それを受けてモンクがボートへと走る。一拍遅れ、おれもまたそちらへと向かった。  
幾度目かの呼びかけの後、パイレーツの声が明るくなる。

「おーい、大丈夫か？」

何か返事があったのだろうか。残念ながら、聞こえてきたのはパイレーツの面白そうな笑い声だけだった。きししとヘンな声で笑うと、やつはおれたちへと新たな指示を出した。

「ボートはいいから、うきわもってきて」

そんなパイレーツの言葉に、救命ボートを結わえるロープに手を伸ばしていたおれとモンクは顔を見合わせた。そして、どちらともなくうなずくと、パイレーツの言った通りにうきわを用意する。

うきわを手に船首の方へ戻ってきたとき、おれは異変に気づいた。光が、と。そうつぶやくおれに、皆もまたうなずいた。

あれほどまでに明るかった光が、少しずつ暗くなっていた。そして、遠ざかっていくように見える。ああ、と。少し下がった位置にいたプリンスが、ランタンを持って、船縁から海をのぞきこむ。少しばかり頼りなくはあるものの、ないよりはマシだった。

光がすっかり消えたころ、小鳥が鳴いたみたいな声が聞こえた。ええととプリンスがランタンを動かして、場所を探す。あのあたりだろう、いやここだと外野のアドバイスに右往左往したあげく、立ち泳ぎで手をふる子供の姿を照らし出した。

「よーしよし。今からうきわおろすぞー」

満面の笑みを浮かべ、上機嫌に船を見上げてくるゾディアックに、パイレーツがそう声をかけた。ぴいという返事を聞いた後、彼はおれに頷きかける。おれは船に沿うように、ゆっくりとロープのついたうきわを下した。

たるませたロープを引く合図を確認した後、慎重にゾディアックをひきあげる。人一人分とは思えぬほどの軽さだった。無事甲板へと引き上げると、ただいまらしき鳴き声の後、子供は満足そうな表情でおれに抱きついてきた。……いつのまに脱いだものなのか、白い下着姿だ。なるほど、さっき視界の隅で何かが動いたような気がしたのはこれが。べったりと全身塩水でぬれたまま、細い腕をおれの身体にまわし、頬をすりつけてくる。愛らしいというに相応しい姿だった。だが。

おれは無言で、胸のあたりのつむじを見下ろしていた。様子がおかしいと思ったのだろうか。おそろおそろといった様子で、ゾディアックは顔をあげた。おれは無言のまま片手をあげ、甲板をさす。

「……」

「座れ」

短い言葉に、ゾディアックは幾度か目をしばたかせた。

「まーまー無事で帰ってきたんだし」

「そういう問題ではない。そこに正座だ」

パイレーツの軽薄な声を、一刀の元に切り捨てる。おれの低い声に何かを悟ったか、ゾディアックはぴいと一声鳴くと、数歩下がり、ちんまりと正座をした。

「何をしたかわかっているか？」

おどおどと、ゾディアックはおれを見上げている。

「確かにパイレーツの言い方では危険がないように聞こえたかもしれない。もしかすると、危険がないことを知っていたのかもしれない。しかし、黙っていきなり海に飛び込むとはどう言うつもりだ」

しゅんとした表情になったゾディアックは静かに頭をたれる。そして、小さくくしゃみをした。かまわず続けようとしたおれを、モンクが遮る。

「風邪ひいちゃうよ」

そう言って、ファーマーたちに合図をする。うち二人がうなずきあうと、ばたばたと船室へとかけこんでいく。

「昼はともかく、夜は結構冷えるからにい」

お説教は後にして、見張り交代の後休んだ方がいいのではないかと、そんなパイレーツの提案に、おれは眉を寄せた。その向うでは、ファランクスが本当に無事でよかったとゾディアックをのぞきこみ、本当に痛いところなどはないかと確認している。

よくがんばったねとキャンディでもさしだしそうなギルドメンバーたちの姿に、おれはためいきをついた。そして、少し強い調子でゾディアックを呼ぶ。

ファーマーのうち一人が持ってきたふかふかのバスタオルにくるまれ、びくりと子供は身体を震わせた。そして、ひざをただすところを見上げてくる。そのさまに、モンクが眉をよせた。多分、風邪をひかせるのを気にしているのだろう。もっとも、これ以上長引かせるつもりはない。ゾディアックは十分に素直で頭のいい子供なのだ。

「海で興味をひかれるものがあった場合、必ずほかの誰かに聞くこと。そして、確認してから手を出すこと。……ケガでもしたらつまらないだろう」

ケガくらいですめばともかく。大海原にしる、世界樹のなかにしる、命の危険はありすぎるほどに存在する。たとえ、星を呼ぶことのできる存在（ゾディアック）とて、相手に降り注ぐ間もなく鋭いつめでひっかけられでもしたら、あっさりと彼岸へと旅立つこととなるだろう。そういった懸念をさとしたかどうかはわからない。ただ、ゾディアックは神妙な表情でうなずいた。

背後で誰かがふきだす声を聞く。多分、パイレーツあたりだろう。そちらを見ずに、おれは再度口を開いた。

「ゾディアックに限らずだ。同行する人間を危機に陥れる可能性もある独断先行は慎むように」

強い調子でわかったかと告げると、ばらばらと返事があった。真面目なものもあれば、茶化すようなものもある。それらが収まってから、おれは見張りの交代について指示を出した。そして、非該当者にはゆっくりと休むようにとも告げる。それなりの動きを確認してから、おれは再度、静まり返った海を見る。先ほどの光が嘘のように、ただ漆黒の水の壁のみがあった。

「結局何があったんですか？」

そんな声が聞こえ、おれはふりかえった。船室の入り口に、プリンスとモンク、そしてゾディアックがいた。皆、夜明けまではもう少しあるから寝ているという指示をだしたメンバーたちだ。

おれが気づいたことを知ったのだろう。ほんの少し気まずそうな表情で、プリンスはおれを見た。ゾディアックもまたこちらを見る。おれが何も言わないのを確認してから、再度プリンスを見て、首をかしげた。そして、しばし後、ふるふると首をふった。え、と、プリンスは幾度かまばたきをした。

「ええと、それって」

「何もわからなかった、って。そういうことかな」

モンクの翻訳に、ゾディアックは大きくうなずいた。そっか、と。モンクはうなずいた。そして、しばし後。

「そうかあ」

心底残念そうに、同じ言葉をくりかえす。プリンスの方は、そこまで素直に感情を外にだすことはない。なんとなく、表情をひきつらせているだけだった。

残念だったねとモンクがいう。ゾディアックは頷いた。

「今度はしっかり確かめようね！」

明るく前向きなモンクの言葉に対し、おれはわざとらしくせきばらいをした。そして、三人が

こちらを向いたのを確認してから、再度、早く寝ろと言って、船室を指さした。

fin.